

派遣先所属 福島県観光交流局 県産品振興戦略課 氏名 伊藤 勝也

派遣期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

派遣先の県産品振興戦略課では、主に、福島県産品のPR、商品力の向上、販路の開拓・拡大、伝統的工芸品の振興、首都圏アンテナショップ、等に関する業務を行っています。

震災及び原子力災害の発生以降、被災地復興支援の流れはあるものの、全体として消費者離れ、企業間取引の減少等の厳しい状況が続いており、福島県内の加工業者及び生産業者は、極めて深刻な影響を受けています。

こうした状況を踏まえ、迅速・適確な安全性のPRに取り組むとともに、商品力強化や産品開発に取り組み、風評被害の払拭及び販路の回復・拡大を図る必要があります。

主な担当業務は、①大型食品展示会への出展に関する事、②物産展の開催に関する事、③復興支援の提案に関する事、④「Fukurumカード」に関する事、等です。

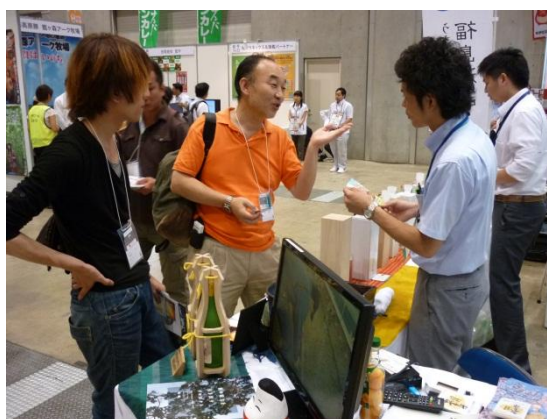
①：大型食品展示会へ福島県ブースを出展し、首都圏のバイヤー等に県産品の安全性をPRするとともに、県内事業者の商談機会を創出し、県産品の販路の回復・拡大を支援します。

②：消費者の方々への県産品の安全性のPR及び会場百貨店等での県内事業者の商談機会の創出を図るとともに、本県観光資源の紹介・宣伝による観光誘客の促進を図るため、北海道及び首都圏で物産展を開催します。

③：福島県の復興に向けて、首都圏等の企業・団体から、復興応援イベントへの出展等の御提案をいただき、主催者や出展事業者等との調整を行っています。



今年度開催した札幌展の様子



アグリフードEXPOでの日本酒PRの様子

④：「Fukurum (フクラム) カード」は、クレジット機能付きの会員カードです。カード利用額の一部が福島県の風評被害の払拭及び県産品の振興に役立てられる点が最大の特徴です。(支援金の発生に伴うカード会員への負担はありません。)



ご入会・詳細は で検索

(<http://www.nissenren-sendai.or.jp/fukurum>)

担当業務を通し、震災後の厳しい状況について、福島県内の事業者の方々から直接話を聞いています。

福島県の場合、原発事故に伴う風評被害という要因があるだけに、長期間の支援が不可欠であることを日々感じています。

2 復旧・復興状況や被災地での見聞・感想

福島県が誇る国指定伝統的工芸品「大堀相馬焼」（浪江町）は、震災により窯が損壊し、さらに原子力災害により窯元の皆さんが避難を余儀なくされましたが、新たな生産拠点を二本松市に移し、「陶芸の杜おおぼり 二本松工房」として再スタートしました。



開所式の様子



「青ひび」、「走り駒」、「二重焼」という3つの特徴があります。

派遣先所属 福島県観光交流局県産品振興戦略課 氏名 吉野 牧人

派遣期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

私は、福島県観光交流局県産品振興戦略課という部署に派遣され、主に震災及びそれに伴う原発事故による風評被害対策に関する業務に従事しています。

皆さんも御存知のとおり、東日本大震災以降、農産物・加工食品問わず「福島県産品」に対する取引停止・価格の暴落が起きています。たとえば福島の代表的な果物である「桃」は、昨年東京卸市場での取引価格が前年比で約50%も下落しました。科学的な分析を行い、安全性が証明されても「福島県産」という理由だけで消費者に敬遠されてしまう「風評被害」は未だに続いています。

風評被害が長期化することで生産者の意欲が失われることはもちろんのこと、将来を担う若者の知識や技術を習得する機会が奪われ、産地が衰退します。売り場から福島県産品がなくなり、あったとしても他産品よりも低価格での販売が常態化します。福島県が生き残るためにも、風評被害の払拭は早急に取り組まなければならない課題なのです。

こうした状況の中、私の主な業務は「海外販路の開拓」です。震災前から福島県では経済成長を続ける東アジア地域（中国、香港、台湾、韓国など）において、国内市場と同様に海外市場を重要な市場と捉え、販路の拡大を目指していました。ところが、震災後はほとんどの国や地域で福島県産の食品に対して何らかの輸入規制措置がとられることとなり、海外輸出の扉は閉ざされました。

転機となったのは、今年の8月です。比較的輸入規制が緩やかであるタイ王国の大手百貨店のバイヤーや現地輸入会社の担当者を福島県に招へいし、福島県産桃の販売を検討していただくことになりました。当日は放射能検査の様子を見学し、桃農家にも足を運んでいただきました。海外では、国内以上に原発事故の影響を過大に報道する傾向があり、福島県に踏み入れることをちゅちよする方もいます。しかし、大抵の場合、福島県に足を踏み入れ、土地のものを口にすればそうした不安は消え去ります。「こんなに美味しい桃は生まれて初めて食べた」桃を試食された方からはこんな感想をいただきました。もともと日本の食品は高品質で海外でも人気が高いこともあり、安全への不安が解消されたことで輸出に向けた交渉が始まりました。



放射能検査の様子を見学



収穫した桃を試食するタイ人バイヤー

そして、9月12日、青果物としては震災後初となる福島県産桃の海外販売が実現しました。輸送コストがあるため1個約700円と決して安くありませんでしたが、予定よりも早く完売しました。良くも悪くも忘れやすいタイ人の気質なのかもしれません。懸念していた安全性についても「タイ政府が安全だと言っているのだから安全なのでしょう」という反応がほとんどでした。

桃の収穫時期は限られます。福島の桃の最盛期は8月上旬から中旬であるため、今回タイ王国へ輸出した桃は晩成種に当たります。この晩成種であっても10月半ばで収穫が終わるため、その2週間後には第二弾、さらに2週間後に第三弾と続けてプロモーションを行いました。第三弾では、震災時の支援に対する御礼として、タイ王国の王室に桃の献上もしました。



桃販売の様子。筆者も初回は現地でプロモーション活動を行いました。(バンコクの百貨店にて)

こうして書くところか風評被害の対策なのか疑問に感じる方もいるかもしれません。このニュースは福島県内だけでなく全国的にも報道されました。遠く離れたタイ王国で、1個約700円と高価であっても福島の産物が受け入れられ、タイ王国の王室でも福島の産物を召し上がっていただいたことは産地を勇気づけるだけでなく、価格低下に悩まされている国内市場にも良い影響を与えたはずです。また、既に書いたように各国・地域には輸入規制があります。こうした措置は近隣諸国の動向に影響されることが多いため、閉ざされた扉が再び開かれるきっかけとなるかもしれません。

ただし、これらは短期的な影響であり、長期的にはもっと大きな狙いがあります。今回輸出先となったタイ王国が加盟するASEAN（東南アジア諸国連合）では3年後の2015年に経済統合が予定され、近い将来6億人近くの巨大マーケットが誕生します。そのマーケットの物流の拠点となるのが、タイ王国の首都バンコクです。このバンコクを足掛かりにベトナム、ミャンマー等のASEAN諸国へ事業を展開するため、日本企業だけでなく、中国、韓国、アメリカの企業が今こぞって進出しています。国内市場は少子高齢化などで全体のパイが縮小する一方、ASEAN諸国は今後マーケットの拡大が見込まれます。今回、現地の関係者とコネクションができたことは将来福島県が生き残っていく上で大きな意味を持つことでしょう。



次回の桃の輸出について、現地小売店担当者、輸入商社を交えての打合せ

しかし、ここに至るまでの過程は順風満帆とはいきませんでした。いくら品質が良くても県庁が音頭をとるだけで商売ができるほど甘くはありません。輸出が実現するまで、生産者に始まり、運送会社、日本の輸出商社、現地の輸入商社、現地の小売店など多くの人が関わり、お互いの信頼がなければできません。それぞれ立場があり、うまくいかないことも多々ありましたが、一緒に働いている福島県庁の職員の皆さんの情熱と諦めない気持ちのおかげで実現できたのだと思います。さらに遠く離れたタイ王国でも福島と全く縁がなくても福島のために協力していただける方々が多くいました。福島の人だけでなく、こうした方々支えがあるからこそ復興に向けて歩いていけるのだと感じました。

現在は桃の収穫時期も終わり、やっと一息という状況です。しかし、ここで築き上げた関係性を絶やさないとともに、次なる輸出、そして来年度以降の準備も進めていなければなりません。福島県の復興は他の被災地と違って何十年のスパンで考える必要があります。長い道ではありますが、派遣先での仕事によって僅かでもお手伝いできれば、そう考えながら仕事をしています。

2 復旧・復興状況や被災地での見聞・感想

私が福島県へ派遣されたのは、震災から約1年後、今では1年半が経過しているため、福島市内を歩いても震災の傷跡はほとんどありません。しかし、風評によって、観光客は減少しています。地域によっては、回復傾向にあるようですが、全体としてはまだ震災前に遠く及ばないようです。

私も福島県に生活するようになってから休日は県内を車で回るようにしています。福島は、旬の食べ物が豊富で、少し足を伸ばすだけで美しい景色にも出会えます。温泉も近くにたくさんあります。これまで福島を外から見ていたので気付きませんでしたが、福島には素晴らしい観光資源がたくさんあります。

震災後はどうしても原発事故の報道が多くを占めますが、ほとんどの地域は普段どおりの生活を送っています。実際に来て、見て、味わい、福島県のことを理解することが被災地を勇気づけることになるのだと思います。これから厳しい冬を迎えますが、お時間があるようならば是非福島にも足をお運びください。